

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年6月 第208号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

『葬送のクルマ』に敬意を表す社会へ

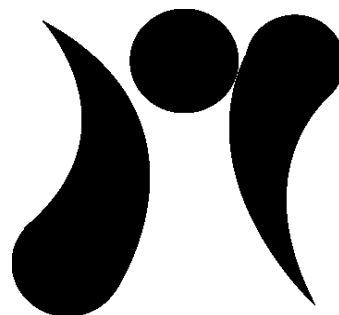
団塊世代の全員が75才を超える「2025年」が問題視されています。「第1次超多死社会」の幕開けです。その幕が閉じる頃、団塊ジュニア世代が後期高齢期を迎えます。第2次超多死社会です。其の幕が閉じると日本社会は一気に「超人口減少社会」へと進みます。ジュニア誕生以降40年以上に亘って続く少子化は、社会の引継ぎが上手く出来ていない現実の象徴です。

人間以外の動物は、遺伝子で引継ぐ本能によって死期を悟ると群を遠く離れて土に還りますが、人間は最期が近づくと子や仲間達に老いの身を委ねて、集団の中で息を引き取ります。数ある動物の中で人間のみが持つ本能的習性であり、吾身が最期を迎える様子をつぶさに見せて、社会生活に必要な『思想や社会性』を創る『基礎的な体験』をさせているのだと思うと、何となく納得がいきます。バトンタッチの営みです。其れが上手く出来ていないのです。

人間は、幼児期の「養育期間が十数年」と他の動物に比べて異例に長く、又女性が50才前後で生殖機能を失ってからの生存期間も異例に長い動物です。乳児がその無防備な身を大人に委ねて成長する10年余りの時間と、無防備になった老いの身を他者に委ねて最期を迎える平均10年余りの要介護期間とは共に、『社会を構成』する人間にとって非常に『重要な意味と役割』を持つ営みである事を強く感じます。この2つの異例に長い時間は、人間の『本能的習性』として密接につながっている様に思えます。

全く無防備な姿で生れる乳児は、その存在を無条件に受容れ育てる親や大人の『愛情』を受けて成長します。その過程で無意識の内に『他者への信頼感』を心身の奥底に蓄積し、そして80年～90年と生きて最期を迎える際に、無防備な老いの身を委ねる『他者への信頼』と『覚悟』を生み出します。

(次ページに続く)



(前ページの続き)

老いの身の『覚悟』に触れる時、介護する子や後輩達はその状況を受容れざるを得ない現実と向き合い葛藤しながらも、幼児期の基礎的な体験がよみがえり、やがてその存在を無条件に受容れる『愛情』に目覚めます。其の営みの中で、人間が社会を構成して生きる上で最も重要な『愛情と信頼の循環』が成立し「死後にも続く関係性」が築かれます。1000年～2000年と歴史が続く『人間社会の原点』が其の「循環を生む関係性」に在る様に思います。

今、介護現場では「介護予防」「重度化防止」を目指す「自立支援型介護」が重要視されています。世間では多くの方が「健康でこそ幸せ」「子供に迷惑を掛けたくない」と言います。「健康で長生き」は万人共通の「個人的願望」です。しかし同時に一方で、『社会的な存在』としての役割を果たす為の『本能的習性』も万人が持ち併せます。『他者に委ねて最期を迎える姿』に大きな社会的な役割が在る事を、人は本能的に気付いているからこそ、限りある命がつながって連綿と歴史が続いて来たのです。介護現場では、身動きもままならぬ吾身を他者に委ねる『老いの信頼と覚悟』を感じて、其れに応える、『鋭い感性・感覚と人間性』が介護する者に強く求められます。「自然の一員」「社会の一員」として生きる人間にとって、本能としての鋭い感性・感覚が、最期を迎える営みの中で大きな役割を担っている事を強く感じます。

7年前の東日本大震災において多くの犠牲者が出た宮城県石巻市で、大川小学校で犠牲になった23人の児童の保護者が県や市や教師集団に対して求めた損害賠償請求訴訟が、最高裁判所に上告されました。新聞紙上では法律上の責任論が伝えられますが、法的責任を超えて「自然の一員として生きる力」を見据えたもっと『根本的な議論』が必要ではないのか？と強く感じます。『吐気を催すほどの恐怖感』の中で40分間以上もじっと待機して津波に流された子供達の無念を想う時、法律上の管理責任からは『教訓として残す重要性』が心に響きません。『津波てんでんこ』の言い伝えが残る地で『子供達に直接教えるべき事』は無いのだろうか？『身が震えるほど怖かったら逃げろ』と教えてはいけないのだろうか？等々、強い疑問が残ります。

生れて10年前後の子供の『本能的な感性や感覚』は、世俗的な既成概念や個人的な固定観念が染みついた大人の感性・感覚と比べて『動物的な鋭さ』を十分に備えていると思えます。その動物としての本能が、数十年後の老いの身を支え、吾身の死期を察知し、『死と向き合う覚悟』を生み出すのです。自然の摂理に添って生まれ、自然の摂理に添って老いて死を迎える人間は、誕生と終焉に伴う本能的習性がつながり合って『愛情と信頼が循環』して歴史が続く社会を創るのです。幼子を受容れて育てる『愛情』と、「老いと死の本質」から目をそらさずに介護して看取る『覚悟』が密接につながっている事を心に留めて『死後にも続く関係性』を大事にしたい、と願います。超多死社会において主役の最期を看取り見送る際の作法や儀式は、「老いと死の本質」と向き合った「覚悟と人間性」が写し出される営みです。

同時に其れは、幼子を受容れ、その身に愛情を注ぐ『豊かな社会性を帯びた営み』につながります。この世で最後に乗る『霊柩車』には道行く誰もが敬意を表せるような『判りやすい設えの車』が似合います。そっと手を合わせ、目礼し、さり気なく道を譲る「余裕」が、長寿社会には似合います。その「余裕のある社会」でこそ、人から人への『バトンタッチ』が成立するのだと確信します。長寿の終焉には『敬意』が似合います。

「自立支援」という言葉があります。一般的には「自分でできるようにするために指導・支援すること」と思われがちですが、本来の意味は「自己決定をして、自分の過ごしたい生活を過ごせるように支援すること」で、自分らしい生活を送ることができているかどうかが大変なポイントです。自分らしく生活する為に、足りない部分を人の力を借りることで生活の質を維持・向上すること・・・

そのことを教えてくださったOさんは、生まれながら軽度の知的障がいがありましたが60歳まで左官業の手伝いなどの仕事をしながらお母さんと暮らし、仕事終わりにはお酒を飲んで自由気ままに自転車で遠くまで出掛け、玄関先で大好きなカラオケのカセットテープを大音量で聞いて暮らされていたそうです。お母さんが亡くなった後は隣に住んでいた弟さんが身の回りの世話をしてくれていましたが、少しずつ膝が悪くなって介護が必要な状態になり介護認定申請をされ、デイサービスやヘルパー・ショートステイなどを利用しながら、昔ながらの土間のある段差の多い自宅に一人で暮らされていました。

除々に膝の変形が酷くなり、それまで自宅での移動手段だった伝い歩きや這うこと自体ができなくなってオムツを当てるようになった時、主な介護者であった弟さんから「歩けない、這えないなら自宅で暮らすのは無理だ」と本人に話をし、特養への入所前提で長期ショートステイに入所することになりました。Oさん自身は施設で生活することを納得できないまま入所されたので、受け入れることができず約2カ月大声で泣き叫んで過ごされていました。排泄の部分は人のお世話にはなりましたが、施設の敷地内は車椅子に座っていれば自由に行動できたので、園の中で自分らしく生きる道を見つけられました。大音量のラジオをイヤホンで聞き、車椅子に乗ったまませりょう園の敷地内や施設前の歩道を自由に出掛けられました。悲しい時には大声で泣き、嬉しい時にはこやかに「今日は〇〇が美味しかったわ」「今お風呂入ってきた。気持ち良かったわ」「今日弟が来てくれたわ」と家族・職員だけではなく面会に来られた他のご家族やボランティアさん、施設前を通りかかった地域の方などに伝えて回っていました。そんなOさんが唯一譲らなかったのが「オムツを替える時以外ベッドに横になって寝ない」ということでした。一般的には「夜は横になるもの」。でもOさんは長期ショートステイに入所され亡くなる直前までの約2年間、廊下のテーブルに枕を置いて頭を伏せ布団をかぶって寝て、車椅子に24時間座ったまま暮らされました。足は浮腫み、お尻には床ずれができましたが、ギリギリまで車椅子に座ることを望み、部屋から出ていつもの場所で過ごし、大好きな煙草も吸っておられました。

歩けなくても自宅で最期まで暮らせたかもしれません。しかし施設に入所された後、Oさんが自分らしく生活する為に大事なことを最期まで伝えてくれ、その自己決定を最期まで園や地域全体で支援させていただけたことに感謝しています。

利用者の方と一緒にあじさい作りをし、折り紙を職員と一緒に折り、折れない方は色紙をちぎり、皆で協力しました。利用者の方から「青色はハッキリしてよく見える。葉っぱと同じような黄・緑色は葉っぱと同化してよくないな～」と話し、ワイワイと言いながら作りました。

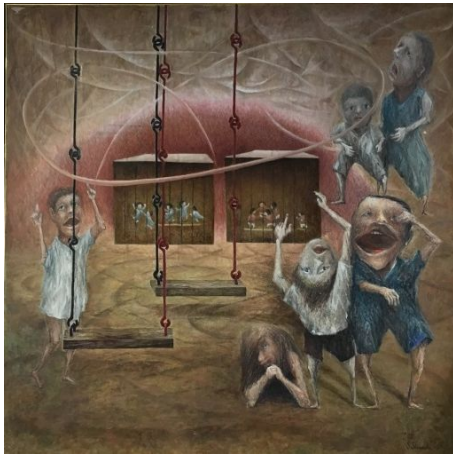
(デイサービス 竹田 美保子)



介護についてみんなで語ろう会【平成30年4月27日】

相談員 岩田 みつ子

『子供の叫び』新協美術会 白坂介明氏作



4月の介護についてみんなで語ろう会はせいりょう園のリバティかこがわの一角に懸げている『子供の叫び』という絵画から何を感じるか、何を読み取るか、そこから介護は何を目指すのか、という事を考え、話し合う場としました。

『子供の叫び』は施設長の中学校の恩師である白坂介明先生が校長の職にあった時に制作された絵画だとお聞きしました。学校の遊具の象徴であるブランコと周囲には異様な目つき、大きく開けた口、手足が細く自分で立って居れずひざまずき、か細い手をかざしている子供

が数人、ブランコの奥には檻の中で笑っている表情の子供が数人描かれています。色彩も独特で決して鮮やかな色ではありません。

参加者の方は絵を見て、「異様」「暗い」「怖い」という視覚からの感想や「教員時代に教えきれなかった事への反省かな」「檻という枠ではなく大きな枠があった方が人間は生きていけるのかな」「いじめ、心の叫びを感じる」等の発言がありました。

今は亡き白坂先生がどのような思いでこの絵を制作されたのかは推し量れないことではありますが、この絵は先生が何か月もの時を費やし、何色もの色を重ねながら40年を超える教員としての引継ぐべき魂の籠もった作品であろうかと感じます。

施設長は譲り受けた時の機関紙にこの絵画を掲載し、東日本大震災での大川小学校の損害賠償の裁判と、昔から三陸地方に言い伝えられている「津波てんでんこ」を紹介し、白坂先生のこの絵画から読み取り、感じた事を述べています。教育の現場で子供を守れなかったのは学校側の管理責任だとの判決に、そうではなくて本来子供が持ち合わせているべき本能を削ぎ取っていることに焦点を当てるのが重要ではなかったのか、と提言しています。

白坂先生の絵画の中の「子供」を「高齢者」にスライドさせてみると私たちは学校と同じような事をしていないだろうかと問いかけます。利用者の方の意向を尊重と言いながら実は自立を妨げ、施設全体を見えない檻にしていないだろうか。そして檻の中で機嫌よく居てほしいと思ってはいないだろうか。徘徊が続く認知症の方と真剣に向き合い、チャレンジする事、それで失敗することも含めて社会の中の一員として存在を認める関わりをしているだろうか。その問いを日々の現場で振り返り、人生の最期に他者を信頼して身を委ねる事をしっかりと受け取り、引き継ぐ事の価値を見いだせる「時」と「場所」を共同する介護を目指したいと考えます。

今年の4月26日に大川小訴訟控訴審判決がありました。またもや行政や学校の防災体制を厳しく批判した決定となりました。しかし教育関係者からは戸惑いの声があるとの新聞報道があり、それはこれ以上の高いハードルを設けたとしても守ることができるのか、教育現場の安全確保の責任を重く感じるという発言でした。

「津波てんでんこ」関連で今年の2月28日に津波語り部の田畑ヨシさんが93歳で亡くなりました。8歳の時に昭和三陸津波（1933年）で母親が犠牲になりその後約40年にわたり、手製の紙芝居「つなみ」で転びながら山の逃げた自らの姿や、破壊的な町の様子を描き、

人に構わず一目散に逃げろという「命てんでんこ」の教えを伝えてこられた。3・11の震災後「紙芝居を思い出して避難し、助かりました」という手紙が届いたそうです。裁判の判決とともに何が命を救うのかを考えさせられました。

平成30年度の介護についてみんなで語ろう会はせいりょう園の理念を基に日々の介護の事例を通して現場の生の声を発信し地域の方々と共に考え、意見の交流を図りたいと計画しています。一人の人間として他者に身を委ねて介護を受けて自然に死んでいかれる様をしっかりと受け止め伝える事が大切な私たちの役目と思います。

今年度もどうぞよろしくお願い致します。



研修委員になって

デイサービス 稲城 玲香
(社会福祉士)

せいりょう園では昨年より研修委員会が立ち上がりました。各事業所の職員が一名ずつ委員に選出され、私は一年間委員会に携わりました。利用者がよりよい生活を送れるように「選ばれる施設になるためのスキルアップ」を目標に活動してきました。せいりょう園の職員研修では、マナー講習や口腔ケア、感染症予防、ADL研修、虐待についての研修を企画し、園外研修では小学校の授業の一貫で職業の体験・話をする「職業人と語ろう」等に参加しました。

委員になる前は他部署の職員との関わりがあまりありませんでしたが、委員になってからは他部署の職員と話す機会が増え、情報共有ができて良かったと思います。最初は、日常の業務に追われ「自分にできるのだろうか…」と不安に思うこともありましたが、園内研修の担当やグループワークでの司会・進行役をすることによって自分の中で責任感を持ち活動できたのではないかと思います。委員として活動した一年間は、勉強することが多くスキルアップする機会になりました。



グランドゴルフ

5月16日(水)10時から、野口ふれあい大学グランドゴルフ部のボランティアの皆様の主催で、特養やユニット、グループホームの入居者の皆さんとグランドゴルフをしました。

当日は天候にも恵まれ、皆さんとても楽しまれていました。車いすの方も杖歩行の方も一緒になり「楽しいわ」「毎日したいわ」と生き生きとされていました。

今後も入居者の皆さん、ボランティアの皆さんとこのような機会を多く作りたいと思います。

(地域密着型特養 藤久 智秀)





真宗大谷派 光念寺 本多 正尚 住職

本日の仏教講話は、真宗大谷派光念寺の本多正尚ご住職です。平成18年12月から始まった仏教講話が、12年目となりました。この間、当初から本多ご住職にご尽力を頂き、何度もご講話して頂きました。この度もお忙しい中、ご無理をお願いして来て頂きました。先程まで宍粟市山崎町のご親戚のお寺の元住職の告別式に参列されていたそうです。お話しもそのご様子から始められました。

「山崎町の須賀沢のお寺で『須賀のごえんさん』と呼ばせて頂いておりました。2歳の時から跡継ぎとして養子に行かれ、95歳になるまでお寺の勤めとボーイスカウトの全日本大会や世界大会等で活躍され、波乱万丈な人生を送られました。跡継ぎの息子さんが、お通夜のご挨拶で『父親のキャンプファイアに集って頂きまして、ありがとうございます。』と言われ、キャンプファイアの時の歌を泣きながら歌われました。2歳から本当の親元を離れ、ショックやったん違うかなあ、親をうらんでしまうんじゃないかなあ、家を飛び出すほど嫌な事もあったのだろうか、でもそこのお寺のいろんな人間関係の中で立派に勤めてこられたのだらうと思ひながら『燃えろよ燃えろよ 炎よ燃えろ』の歌を聞きました。

一番大事なものはお父さん、お母さん。次に大事なものは友達。もうしばらくすると、結婚して嫁さん、主人が大事になってきます。お父さん、お母さんが大事でなくなったかな、でもそんな事はないのです。身近な所に大事な人としてご縁が出てくるのです。こちらからあなたに思う心は一番なのに、これもいろいろなご縁の中での事です。でもその眼は変わらずにこちらへ向けているのかも知れません。どちらも大事であっても、自分しか大事だと思わなくなってくるのかも知れません。

お釈迦様は亡くなられる時に、『私の像をこしらえて、拝んで供養しなさい。』とはおっしゃっていません。自分の家に帰る途中に亡くなられました。頭を北に、顔を西に向けておられました。北の方に自分の親の眠っている土地があったからです。何が何でも北向きでないといけないと言う事ではありません。お仏壇が南の方にあつたら南を向きますよね。でも、一つも変わらずに心は向けられているのです。

暑くなってきましたと、お盆が来ますね。関東では7月にお盆を迎えます。関西では8月に入って迎えます。』と言われ、盂蘭盆経の話がされました。

「仏様の弟子の目連さんのお母さんが亡くなられ、神通力で見通したら、お母さんは餓鬼道に堕ちておられました。目連さんは母親を救う為にお釈迦様に助けを求めました。お釈迦様は『あなた一人では無理です。仏の心を持って生きておられる方々を供養しなさい。見ず知らずの方を供養しなさい。そういう方々の生き様を頂いていくのです。』と諭されました。亡くなりましたら、仏様になると言いますが、例えるなら後に残った者の灯りになる事です。

赤塚不二夫さんが描かれた『天才バカボン』のバカボンはお釈迦様の事です。赤塚不二夫さんはそれをご存知だったのです。やるべき事は多くあります。出来る事はどんどん変わっていきます。人と見比べたらこれしか出来ませんが、『これでいいのだ』と導いて下さる。お互いにお互いがこしらえていく世界です。お互いに気付かして頂

くのです。目連さん一人ではいかんとも出来ません。長い命の連続で、そういう中に存在させてもらっている。それを親と一緒に気付かせてもらえるのはありがたい事だと思います。

今日はこのように集まって頂きましてありがとうございました。また、このようなご縁を頂いてありがとうございます。」と話されてご講話が終わりました。心に響く柔らかい暖かいお言葉でした。ありがとうございました。

(サービス付き高齢者向け住宅相談員：岡村 照代)

介護の仕事について思ったこと

地域密着型特養 吉浦 笑
(介護福祉士)

私がせいりょう園に勤務し4年が経ちました。母は介護の仕事をしており、昔から介護という仕事に興味はありました。夫は理容室を営んでおり、自身で来店することが難しくなった高齢のお客様の自宅へ訪問理美容を提供したいと思いました。介護の理解を深めるため私も何かにチャレンジしたいと思い、それをきっかけにホームヘルパーの資格を取得しました。

勤務し始めたころは、まったく自分に自信がなく介助するたびに「これでよかったのかな」と毎日が不安でしたが、いつも先輩方は、移乗やお風呂の介助、オムツ交換、利用者さんへの接し方など時間が空くたびにご指導して下さいました。先輩方と一緒に仕事をするところがあるのですが介助を終えた際、「ありがとうございました。」と言っていたら、助け合う職場の姿勢がとても勉強になりました。

介護の仕事についてから思うことがあります。両親、夫、自分が介護が必要になった時、一番に思うことは、自分らしく過ごせる介護を望みたいなと思いました。認知症になったから「あれはできない」「これをお願いすると時間がかかるからお手伝いしたほうが早い」と思わず、その人の持っている力を活かす介護が利用者さんにとって生きる力となり必要とされる気持ちが喜びになるのではないかと思います。ある日「もうこんな歳まで生きて別に楽しいことないし…」と言われたことがあります。何て返していいかわからず悩みました。私はお年寄りの方に寄り添える介護をしたいと思いました。一つ一つの職員の行動を利用者さんは感じとっています。私達は今思っていること、したいことが自分でできますが、利用者さんはすんなりうまくできない事が増え、私達のお手伝いが必要になる時があります。その時利用者さんは、イラ立ち、自分でうまく出来ずに申し訳ない気持ちになっているように見えます。それを感じとれるのは介護者なので、気持ちに寄り添える介護をすることで、利用者さんの気持ちは落ちつくのではないかと思います。

まだまだ勉強の毎日です。今自分がしている介護が正しいかわからず悩みます。その時々で今何を必要とされているか、どうしたら利用者さんらしくご本人の持っている力を出すことができるかを考え、利用者さんの笑顔がたくさんみられるよう日々努力したいと思います。



【夏休み陶芸体験のご案内】

夏休みの思い出に親子で陶芸をしてみませんか。7/23と7/30は“ろくろ”を使ってお茶碗や湯飲みを作ります。8/6～8/27は自由製作です。子供さんやお孫さんと一緒に挑戦してみませんか。もちろん大人の方だけの参加も大歓迎です。



開催日：7/23・7/30・8/6・8/13・8/20・8/27
時 間：13：00～15：00
場 所：せいりょう園ユニット型特養の横「アトリエ一番星」
料 金：1人（1組）2,500円
※作品のお渡しは後日になります。
講 師：中本万理恵
問合先：せいりょう園 TEL (079) 421-7156

★毎月第1・2・3の日曜日（10：00～13：00）と月曜日（14：00～18：00）に開催している陶芸教室の生徒も募集しています。講師：喜多千景・中本万理恵（入会金3,000円・月謝5,000円・土代1,300円）

【せいりょう園キッズクラブ（小学生対象）のご案内】

日 時：7/23～8/31の平日8時～17時
利用料金：1日1,000円（半日利用の場合は500円）
場 所：リバティかこがわ2F（加古川市野口町長砂95-2）
活動内容：夏休みの宿題や自主学習・書道・造形・陶芸 等

★夏休みの陶芸体験参加できます。

その場合は別途土代（650円）が必要になります。

利用方法：予約制（定員20名）※別紙申込書有り

問合先：せいりょう園 TEL (079) 421-7156



【求人】

①介護支援専門員 ②ホームヘルパー ③栄養士 ④キッズクラブの支援員・補助員

詳しくは、せいりょう園TEL (079) 421-7156までお問い合わせ下さい。

見学も随時受け付けていますので、お気軽にお電話下さい。

★夏休み期間中、職員の子供さん（小学生）は法人内のキッズクラブを無料でご利用いただけますので、子育て中の方も是非ご応募下さい！

【せいりょう園空き情報 平成30年6月20日現在】



○サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：10室
（19.1㎡：3室、20.4㎡：1室、24.7㎡：3室、25.8㎡：2室）

○サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：7室
（33㎡：3室、35㎡：1室、39㎡：2室、41㎡：1室）

★終の棲家としてご夫婦で入居できます。見学も随時受け付けています。

○ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付24㎡）

○グループホーム：空きなし ○グループホームまどか：空きなし

【問合先】せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433